バルトリの新譜「サンクトペテルブルク」～女帝へ捧げられたアリア

豪華お披露目パーティがヴェルサイユ宮殿で行なわれる

文 中東生◎音楽ジャーナリスト text by Shinobu Naka

© CXavier Paris /Decca Classics

黄金に輝くヴェルサイユ宮殿で行なわれたお披露目パーティ

ロシアの防寒の衣装をつけて歌うバルトリ　© CXavier Paris /Decca Classics

チェチーリア・バルトリ待望のニューディスク発売を4日後に控えた10月6日、一時は中止されたかと思われていたラウンチパーティ（リリース記念パーティ）がフランスのヴェルサイユ宮殿で催された。

CDのタイトル通り、当初はサンクトペテルブルクで開催されるはずだったこのお披露目会は、ウクライナ情勢の煽りを受け、招待客に簡単にはビザが下りないことになり、残念ながら断念せざるを得なくなっていた。しかしバロック音楽という観点で見た時、一番魅惑的なバロック様式の建築物であるヴェルサイユ宮殿で催す意義もあるとの判断から、バルトリを含む関係者の情熱が実を結び、当日を迎える事が出来たのだった。

昼から降り出した大雨も止みかけた夕刻、ドレスアップして金色に輝くヴェルサイユ宮殿に向かうと、王様の舞踏会に招待されたようで特別に気分が盛り上がる。ヘラクレスの間でドリンクとアペタイザーが振る舞われた後、ルイ14世の寝室などを通りながら、一同はコンサート会場の「鏡の間」へと移って行く。

ディエゴ・ファゾリス率いるイ・バロッキスティが、ドイツからロシア帝国に招かれたラウバッハのマーチを奏でてコンサートが幕を開けると、クレオパトラを思わせる白いドレスに身を包んだバルトリが、鏡の間の後ろからそっと客席の横を通り過ぎ、舞台に上がった。

今回のCDは、ロシア帝国の3人の女帝、アンナ、エリザヴェータ、エカテリーナが、当時の西ヨーロッパの最先端音楽をロシアに持ち込むために招聘した作曲家達がテーマだ。この、あまり知られていないロシア音楽界のバロック時代に、バルトリは随分長い間惹かれ続けていたと話す。その存在を知った頃には「鉄のカーテン」が調査を遮っており、そのベルリンの壁崩壊後に機会を得た彼女の探索は、ゲルギエフとマリンスキー図書館の協力でようやく実を結んだのだという。

この演奏会でバルトリは、ロシアで初めてオペラを上演した作曲家、フランチェスコ・ドメニコ・アライアの「愛と憎悪の力」のアリアや、モーツァルトの同名オペラより60年も前に、エリザベスの戴冠式のためダオリオとマドニスが作曲した「皇帝ティトの慈悲」のアリアを、初めてのロシア語で披露した。琴線に触れるピアニッシモと吐息を活用した彼女の発声は健在で、それに加えて声に艶を増したという印象を受けた。そして最後はお得意の超絶技巧が満載のラウバッハのアリアで観客を湧かせた。

ラウンチパーティには、スカラ座の総裁となったペレイラ氏や演出家のミキエレット、他、音楽ジャーナリストやレコード会社など著名人も多く出席していた。その中で特にテノールのローランド・ヴィラゾンは、バルトリのカデンツァの凄さを熱く語り、華を添えていた。

終演後、ビュッフェ形式でデザートまでを終えた頃、やっとバルトリが登場した。ひとしきりの歓談を終えた頃を見計らって挨拶に行くと、今までよりももっと人懐っこく「元気？」と声をかけながら、「バーチョ」と挨拶のキスを求めてきた。そんな彼女から、自分でも満足のいく演奏だったことが窺え、こちらも嬉しく充実した気持ちに満たされて、満月に近い月と、同色の黄金のヴェルサイユ宮殿を、惜しみながら振り返りつつ後にした。M

サンクトペテルブルク
～女帝へ捧げられたアリア

フランチェスコ・ドメニコ・アライア：歌劇「愛と憎しみの力」から、歌劇「セレワコ」から／ヘルマン・フリードリヒ・ラウバッハ：歌劇「ペルシアの王、シロエ」から、歌劇「アルツェスタ」から／ヴェンチェンツォ・マンフレディーニ：歌劇「シャルル大帝＝カルロ・マーニョ」から／チマローザ：歌劇「太陽の乙女」より

チェチーリア・バルトリ（メゾ・ソプラノ）
ディエゴ・ファゾリス（指揮）
イ・バロッキスティ
スイス・イタリアーナ合唱団
（ユニバーサル）UCCD-9940　11月5日発売